

三浦圭介・小口雅史・斉藤利男編

『北の防御性集落と激動の時代』

本堂 寿 一

本書は一九九六年十月六日に弘前市で開かれた「日本史のなかの北の『防御性』集落」と、二〇〇四年九月十七・十八日に青森市で開かれた「北日本古代防御性集落をめぐって」のシンポジウムをもとに編集されたものである。二九六ページにおよぶ北の防御性集落研究最初の単行本である。言うまでもなく現在における研究の到達点である。

編集の経緯については本書の「はじめに」（小口雅史執筆）と「あとがき」（三浦圭介執筆）で詳しく述べられている。その第一回目弘前シンポは高屋敷館遺跡（青森市浪岡）の保存運動の一環として北方古代史学会（会長 村越潔氏）によって企画・実施され、第二回目青森シンポは蝦夷研究会（世話人 八木光則氏）を中心に、青森県埋蔵文化財調査センターおよび北方島文化研究会（北海道）との共催で実施されたものである。

弘前シンポの成果は高屋敷館遺跡の歴史的価値を周知させる効果を生み、同遺跡が国史跡に指定（二〇〇一年一月二十九日）される大きな援護となった。一方、その後の防御性集落遺跡の発掘調査や史料による研究にも大きな影響を与えた。その弘前シンポから八年という年月を経て、各県の発掘調査事例を加えた検討会が蝦夷研究会から提起され、青森シンポの開催となった。また、弘前シンポの記録集が刊行されなかったこともあ

り、本書は青森シンポのそれを加えて合本となったものである。

さて本書の構成は以下の目次のとおりであるが、弘前シンポを第一部、青森シンポを第二部とし、それに巻末として各県の防御性集落遺跡（遺構・遺物・調査概要）および発掘調査報告書・研究論文一覧を「防御性集落事例集」として加えたものである。

第一部 日本史のなかの北の『防御性』集落

講演 考古学からみた戦争……………佐原 真

基調報告 高屋敷館遺跡……………畠山 昇

近年の高屋敷館遺跡調査をめぐって……………木村 浩一

討論 防御性集落の時代の北の社会をどのようにとらえるか

（佐原真・三浦圭介・遠藤巖・工藤雅樹・熊田亮介・司会 小口雅史・斉藤利男）

防御性集落の終末と諸郡の建置……………入間田宣夫

第二部 北日本古代防御性集落をめぐって

古代防御性集落と北日本古代史上の意義について……………三浦 圭介

青森県における防御性集落の時代と生業……………佐藤 智生

—その考古学的現状の認識と仮説の検証を中心に—

秋田県の古代防御性集落……………高橋 学

北上盆地からみた東北北部の古代社会……………八木 光則

岩手県の防御性集落……………工藤 雅樹

防御性集落の時代背景……………小口 雅史

—文献史学の立場から—

討論 北日本古代防御集落をめぐって(斎藤邦典・三浦圭介・佐藤智

生・高橋学・工藤雅樹・八木光則・小口雅史・樋口知志・司会 本堂寿一)

「北の防御性集落」研究の到達点と課題……………斉藤 利男

青森大会シンポジウム参加記……………菊池 徹夫

以上のように二回にわたるシンポジウムは考古学と文献史学の代表者によるものであり、それぞれの調査・研究成果をもとに、今後における共同研究の進展を意図したものである。その考古学側と文献史学側の論点については第二部に寄稿された菊池徹夫氏(考古学)と斎藤利男氏(文献史学)の寄稿に余すところなく要約されている。よって本書の内容については最初にこの二論考に目を通すのも一考であろう。ここでは評者が感じたままに概要を述べてみたい。

前述のように弘前シンポの記録集は刊行されなかったわけだが、もし刊行されていたとすれば、その書名は『日本史のなかの北の「防御性」集落』であつたらうか。対して本書は『北の防御性集落と激動の時代』とされた。すなわち先の「日本史のなか」そして『防御性』集落といった、日本史への位置づけに対する不安要素を消去し、名称の確定とその時代的背景の提示に自信を示した書名となった。したがって後者の「防御性集落」と「激動」という表現にこそ両シンポジウムの違いは要訳されるであろう。

両シンポに関わらずともこれまで「防御性集落」という呼称については環濠集落・囲郭集落・高地性集落などといった形態・形状に即した名称が提示されてきた。第一部においては特に木村浩一氏から高屋敷館遺跡の不自然な土塁を例にして防御性集落ではなかったという根強い異論が述べられている。しかしこの名称の統一については第一部の佐原真氏による弥生時代の環濠集落・高地性集落の紹介があり、さらに第二部では三浦圭介氏による林ノ前遺跡(八戸市)の戦闘集落としての実例発表がそれを優位にしたのではなからうか。弥生時代において上記名称は戦乱を伝えた時代用語としてすでに定着しており、佐原氏は構造における高屋敷館遺跡との類例を上げ、土塁を堀の外側に設けるといった守り方もあったと考えた方が良いのではとされ、その証明は将来の課題であるとされた。

本書において「防御性集落」に「北」と付さざるを得なかったことは、日本史上からすればやはり地域的問題であることや、国家圏を越えた「北」の広域概念が含まれるからであろう。たとえば、弘前シンポの討論において遠藤巖氏は、九世紀から十一世紀にかけての北奥の政治的・社会的変化は、日本国の政策とともに中国・朝鮮などの変化ともかかわる問題であり、高地性集落の問題も広くは沿海州から黒竜江の上流部、契丹といった北の問題と関連づけて考える必要があるとした。これに対して工藤雅樹氏は、チャシを含めてサハリンや千島列島の一部に及ぶかもしれないが、とりあえず北は道南地方、南は秋田市・盛岡市以北とされた。これは個別遺跡に論点をおきにくい文献史学と、遺構内容の共通性に論点を求めざるを得ない考古学との違いでもある。また南限に

ついで、工藤氏のいう秋田市・盛岡市以北といった幅を持たせた見方に對して、青森県側の論者は「北緯四〇度以北」といった自然科学による線引きを採用している。この点に矛盾はないのであろうか。

一方、「防御性集落」の時代を「激動」と表したことは、その歴史的背景を一言でイメージさせようとするセンセショナルな表現であり、これこそ編者側が読者に伝えたかったキーワードであろう。この「激動」の年代とは言うまでもなく防御性集落の盛時をさすわけだが、高屋敷館遺跡について畠山昇氏は九世紀から十世紀あたりに出現した集落に環境がめぐらされたのは十世紀後半、そしてそこから出土した木製品の年輪年代から十二世紀初頭まで存続したとされた。一方、第一部の討論では三浦圭介氏の十世紀後半から十一世紀初頭の防御性集落が多いという見解のもとに、文献史学側は防御性集落の年代を十世紀半場から十一世紀末と捉え、その間に相当する歴史的事件に注目する形となっている。討論の中で熊田亮介氏は防御性集落発生的前提として元慶の乱（元慶二年―八七八）までの経緯を述べ、征夷の停止が現地地国司層に指導権が移され、北海道を含む特産物の入手のための政策が現地集団の不满を引き起こしたのが元慶の乱であるとされた。そしてこの乱によつて出羽国内の公民層も北方に逃亡し、十世紀初頭には胆沢城・秋田城を中心に継続されたエミシへの饗給体制も終わったと見る。こうした国家側のエミシ政策の変化こそが防御性集落の発生と結びつくとする見解である。また、遠藤巖氏は、津軽海峡まで一斉に群制が施行されたのは平泉藤原氏の成立した十二世紀の一〇年代であり、高屋敷館遺跡の終末、すなわち防御性集落の終わりと群制の施行が深く関わる可能性を示唆した。

弘前シンポの討論において、北方の人々の呼称がエミシからエゾへかわる変化を持論とする司会の斉藤利男氏は、十一世紀前後の防御性集落の存在と王朝国家北方政策との関わりについて登壇者にコメントを求め、その中飛びを認めない形で討論は進行した。入間田宣夫氏の寄稿は、郡制の施行を延久二年（一〇七〇）北奥合戦の一〇年後とし、遠藤説をさかのぼらせて防御性集落の終末と郡制の開始がリンクするという理解を示した。また、エゾ社会と「日本国」との間で展開した「交易」の中で、富を蓄え、勢力を持つに至った蝦夷集団・族長たちの「拠点集落」として構築されたものが、防御性集落の多くだったという斉藤説を紹介し、上記討論の欠を補う論考となっている。

以上のように文献史学側にとつて、史料に乏しい十一世紀前後の状況から防御性集落の存在理由やその終末を述べるとなれば、どうしても歴史的背景に視点を動かざるをえない。對して考古学側の工藤雅樹氏は、単刀直入に敵はエミシのライバル集団であり、エミシの集団同士の対立抗争が直接的要因であるとす。戦いにそれほど複雑な問題を前提としないこの見解は遺跡と直接向き合つての結論に相違ない。このように弘前シンポでは史料上空白と見なされてきた「北」の年代に戦乱の時代を確信しながらも、考古・文献双方互いの意見交換に留まった感がある。青森シンポは前述のような弘前シンポの内容を受けて開催された。本書第二部の構成においてその点を感じることができる。すなわち三浦圭介氏の論考は弘前シンポでの基調報告とあわせ、青森シンポでの成果も包括した内容となっている。これについて菊池徹夫氏は、シンポジウム全体のいわば勸進元は三浦氏であり、氏の防御性集落に対する論は、

補強・整備されこそすれ、時代観・分布と地域性・構造・形態と立地・性格と呼称に従前からの主張に大きな変化は認められないと評価されている。特に年代について三浦氏は、白頭山火山灰の降下年代（九三〇年代）を地層基準とし、十世紀第3四半期初め（九六〇年ころ）に一斉に発生し、約一世紀半後の十二世紀第1四半期に消滅するとした。その詳細については割愛するが、防御性集落の成立は安倍・清原氏そのものに対する備えであったとする見解である。それは前九年・後三年合戦の主役であった安倍・清原氏の数代前を意味する。さらに林ノ前遺跡（八戸市）の調査結果を総括し、同遺跡は前九年合戦当時の「安倍富忠」、もしくはそれに直接連なる権力者の拠点集落であることは疑いなくであろうと結論づけた。『陸奥話記』という文献と直接結び付けることには文献史学側もためらってきたことではあったが、林ノ前遺跡の年代はそこまで下るといって発掘調査結果に基づいた結論である。また三浦氏は防御性集落の形態について「津軽型」と「上北型」に二分し、その分布の違いとともに集落構成の違いを持論とする。さらに青森シンボでは「上北型」については林ノ前遺跡や向田（35）遺跡（野辺地町）から階層制社会を確信し、「津軽型」を含めてそれら大小組み合わせの分布圏にそれを構成した有機的なつながりを想定するにいたっている。この地域的まとまりを工藤氏が持論とする部族とし、さらにそれを『陸奥話記』の「部」にあて、行政的なまとまりへの発展を示唆する。以上のように三浦氏の論は積極的かつ魅力的である。しかし氏の持論をいっそう深化させた林ノ前遺跡の発掘調査報告書は刊行されてまもなく、それを吟味した研究者の見解が反映されていないことは否めない。

佐藤智生氏の発表意図は、仮説前提の議論停止と考古学的基礎研究の回帰を訴えるというものである。端的には出土遺物の評価をめぐり、防御性集落論をリードしてきた考古学側への批判である。確かに史料批判と同じく、発掘成果なるものへの批判は提起されてしかるべきである。また仮説となれば、間接的論法をもって直接的要因を考えざるを得ない文献史学側も免れないであろう。しかし、考古資料の量的蓄積は求める課題にかならずしも結びつくとは限らないし、しかも考古学と文献史学では大方研究素材は別であり、それによって実証の方法論も別である。求める課題は同じでもそれを生み出す「畑」は異なるわけである。にもかかわらず防御性集落ありきとあれば、文献史学側は考古学側の発表を信頼し、その年代および前後史料の読み直しに必須とならざるを得ない。それ自体文献史学の向上そのものであり、このことは小口雅史氏と斉藤利男氏の論考に十分に知り得るであろう。そうした結果の仮説を含めた歩み寄りこそまさに共同研究である。鎮守府・秋田城体制の強化を防御性集落の誕生要因とみる見解に慎重な小口氏は十世紀前半の諸情勢を重視し、そして十一世紀にまたがる交易体制に現地での軋轢を想定する。一方、斉藤氏は当時の直接史料の模索を試み、軍事貴族の受領官任命をめぐって、十一世紀前後の蝦夷反乱の記事がないという認識は誤っているとする。また討論に参加した樋口知志氏も小口・斉藤説に同調的であり、文献史学側の見解は統一されるかにある。したがって本書タイトルルの「激動」とはそうした見直しへの自信について青森シンボを経て提起されたものと評価したい。その意味において読者はそれぞれの方法論の限界に目を凝らすことも一考であろう。強いてそれを区別するならば、

遺構・遺物を対象とする目に見える論証と、史料背景を対象とする目に見えない論証と見えようか。その上で共有すべき点の確認も可能となる。青森シンポの討論は考古学的成果が主となっているが、そうした土俵を明確にすることと、両者の学術的成果の整理に話題の流れが置かれている。司会の力量不足は工藤雅樹氏のまとめと、聴講された鈴木靖民氏の講評で補われている。

本書の「あとがき」で三浦氏は、名称・年代観・機能などの基本的な点でいまだ異論もあり、本書はこの研究の現在までの到達点であると総括している。今後の考古学と文献史学の共同研究の向上を願うことである。その意味でも秋田県側から高橋学氏、岩手県側から八木光則氏の事例報告は貴重である。高橋学氏は秋田県には区画施設に板塀を有した九世紀末から十世紀前半代の集落が存在したと報告し、一気に防御性集落が出現したという見解に修正もありうることを示唆した。また八木氏は、三浦氏の主張する年輪年代や中国製白磁の出土から高屋敷館遺跡の終末年代を十二世紀初めとする見解に対して、北上川流域出土の土師器杯を対比し、その終末を十一世紀前半とした。このことについて三浦氏は地域的な違いだと反論するが、林ノ前遺跡の土師器杯（かわらけ）の出土状況・編年を含めて、奥六郡・山北三郡との物証による年代の整合性は今後の課題と見られる。同様に擦文文化圏に連なる道南にも年代基準はより厳密に求められるであろう。その点で、青森シンポで発表された斉藤邦典氏のレジメ「道南エリアを中心とした擦文期遺跡の立地・推移について」が本書に掲載されていないことが悔やまれる。一方、高橋氏と八木氏については、十世紀中葉に廃棄となった城柵に代り、文献上

では一見より健在とも受取れる鎮守府・秋田城体制に伴う施設の存在について述べてほしいところであった。しかしこの問題は今のところ考古学的に不明と慎重である。そうした遺跡を含めて、祭祀遺跡と見なされている新田（一）遺跡（青森市・発掘中）といったような未知の遺跡発見は今後もあり得るであろう。要するに各発表内容からしても地域的多様性に加えてさまざまな問題が今後も生み出されるということである。

本書巻末の防御性集落事例集は、これまで発掘調査された遺構図・主な遺物に解説を加えたものであり、またその一覧表および関係文献は現在の研究レベルを知るに十分である。編者を含めた裏方の努力と見たい。その内容に評者の希望をあえて加えるならば、研究史の解説がともなっていないことである。研究史の概略については一応第二部の三浦圭介氏の論考に依拠できるが、それは考古学的調査例に限定されたものである。すなわち防御性集落の究明は決して考古学からのみ喚起されたことではない。歴史上、辺境とみなされてきた「北」ではあるが、そこに生きた人々は、窪んだままの「竪穴住居」や、堀に囲まれた「館跡」といった遺跡に歴史への憧憬を描いてきたことは忘れてはならないであろう。伝承も心を支える歴史として受け入れた北の人々の存在は確かであり、それを肌で受け止めたのが先輩研究者たちであった。たとえば、本書に「蝦夷（エソ）館」という用語が一言も提示されていないのはなぜだろうか。その呼称は妥当なものではないと判断されたとしても、三浦氏は林ノ前遺跡（八戸市）を代表に防御性集落の構造として「首長層城」（弘前市中別所遺跡を「豪族居館」とする）および階層性社会の存在を提起し、また第二部の小口雅史氏の論考では社会的緊張の高まりとして

「エミシ」支配から「エゾ」支配の変化が論じられている。加えて分布について三浦氏はこれまでの発見数の割合から青森県における四百余の中世城館のうち五割前後はこの種の集落と重複している可能性が高いとし、そのこと自体を防御説の一根拠としている。そうとすれば、古代同様に史料に乏しい北の中世であり、古館遺跡(平川市)のように出土遺物が無いからと、先行の防衛性集落をもって単純に中世を消去してはならないであろう。かつて沼館愛三(八戸市・故人)は『南部諸城の研究』(草稿は昭和二十年代前半)で中世城館と「蝦夷館」の重複例の多いことを提示した。すなわちその実証は発掘がともなわないだけに近年まで据え置かれたに過ぎないのである。今となればそれは先見の明であり、やはり研究史に刻まれるべきであろう。また、第二部の工藤雅樹氏の論考は岩手県側の防衛性集落(高地性集落)の実例報告であり、青森県側との形態・年代の違いが提起され、この存在を抜きにして防衛性集落の変遷は問えないこととなった。特に岩手郡における高地性集落の発見については暮坪遺跡・子飼沢山遺跡(八幡平市)を含めて故人となった近谷秀雄(盛岡市)の努力によるものである。在野にあつて学会に提起する論文となりえなかつたわけで、これも学史に留めなければならぬであろう。また学術的な面では、実態の把握には及ばなかつたものの、防衛性集落研究の先駆となつた『館址』(東京大学東洋文化研究所・一九五八)は、研究者による「北」辺に対する憧憬がどのように変化してきたかを知る上でも欠かすことのできない文献である。

さらに全体的に評すれば、本書は、防衛性集落をわが国の城郭史に位置づけて見る視点に不足していなかつたらうか。それは、これまでの発

掘調査成果とともに多くの研究論文によつて、現在では城郭史の序列に位置づけられているといつて過言でないからである。城郭とは戦闘およびその防衛施設であり、問われることは「戦争」である。それだけに防衛か否かというこだわりもあるわけだが、これについて第一部で佐原真氏の「考古学から見た戦争」(遺稿)はまことに当を得た講演であつた。

ここでは戦いのあつた社会を証明する手立てとして第一に防衛を固めている村の存在、第二に武器の存在、第三に殺傷された人の墓、第四に武器を備えた墓、第五にお祭りの道具になつた武器といったことが提示されている。以上は弥生時代の環濠集落の中でも吉野ヶ里遺跡(佐賀県)の調査成果を想起させるものの、考古学による実証はかくあるべしという提言であり、加えて、戦うことは死生観に及ぶ問題でもあることが示唆されているといえよう。城郭を構えての戦いは、戦略上の例もあるが、目的は占有地にせよ領有地にせよ、自らが生きながらえる土地を堅持することである。しかし、戦争は闘争本能がならしめることでないことを考古学は主張する。よつて防衛性集落においても、野蛮ながら戦闘のフイア・ブレイ、英雄の時代からいわゆる武士の時代といった豊かな精神性を模索することも許されるのではなからうか。畠山昇氏は「高屋敷館遺跡」は防衛に敵う構造かという疑問を率直に述べ、本遺跡のみの例を取り上げて論議すべき問題ではないとした。さらに木村浩一氏は防衛より自己顕示性の性格を強く持つと主張した。こうした単純に戦闘施設として割り切れない個性が防衛性集落の時代性や地域性であつたとすれば、そこにはチャシやグスクなどとともに、精神的なあり方も介在したに相違ない。確証困難としても防衛性集落に沈殿している「北」の心や情景

を探る、そうした共同研究もまた魅力的ではないか。

ないものねだりで書評からやや逸脱したが、ともあれ、それぞれの立場で本書の一読をお勧めしたい。ただ、七〇〇〇円と高価であることが悔やまれる。

(A5判、二九六頁、同成社、二〇〇六年八月刊)

(ほんどう・ひさいち 前北上市立博物館長)